

山形内藤論争：社会を変えるには？

内藤朝雄 2005/11/17 11:10

すいません。わたしはまだ「子犬」で論陣をはるためには、どういう手段を用いればいいのかわかりません。教えてください。自分のブログに書くぐらいの手だてしかありません。もし雑誌などで警告を発する機会があれば、今の追いつめられた仕事が終わり次第やります。この件では論陣をはる必要を感じています。

わたしは社会に妬みと憎悪と乱暴な攻撃が蔓延することをとても心配しています。これが「民主主義」と結合すると、とんでもないことが起こりそうな予感がします。かつてドイツで起こったようなことです。ハイエクは、ステーキのナチという言葉をあげていました。赤と黒は容易に反転します。憎悪と妬みと、人生の不遇に対する被害感で毒づいた攻撃的な左翼メンタリティの厚い人口層ができることは、危険です。

いわゆる「ネオ・リベ」的な政策はこのような憎悪を社会に蔓延させるのではないのでしょうか。新自由主義と新保守主義が構造的にカップリングしているという話がありますが、新自由主義と「憎悪と妬みの左翼-右翼連続体（ラヂカル・ステーキ）」の構造的カップリングが生じるおそれがあります。

かつての魔女狩りは、当時大学をつくりすぎて職にあぶれた大学院出の厚い人口層が中心的な役割を担ったという話がありますが、今、大学院をつくりすぎて絶望的な呪いの徒を量産しています。この大学院のつくりすぎが、将来に大きな禍根を残すでしょう。

ひとりひとは単にみじめなだけです、これが人口層になるときわめて危険な人間類型の、貴重なサンプルを彼らのわめき声から収集することができます。

サンプル

<http://f.hatena.ne.jp/sugitasyunsuke/20051019012044>

<http://d.hatena.ne.jp/sugitasyunsuke/20050923>

<http://d.hatena.ne.jp/suuuui/20050808>

<http://d.hatena.ne.jp/suuuui/20050806>

<http://d.hatena.ne.jp/suuuui/20051112>

東京シュール関連の貴戸理恵バッシング

今は過去ログになった2ちゃんねるの貴戸理恵スレッド

東京シュール自体はどうでもいい組織だけど、ここで典型的にあらわれた憎悪の論理は、将来あぶれてみじめな生活を送ることになる大学院出の厚い人口層が担い手になるでしょう。つまり、日本中の大学院が「シュール大学」（と機能的に等価）になるのです。

就職先もないのに、需要と供給のバランスを無視して大学院を増やすのは危険です。文部省はすぐに政策を変えるべきです。

やまがた 2005/11/17 21:09

いまのフランスの状況を見ると、ネオリベリズムよりもむしろ、サヨク色の残った既存労働者の権利保護を厚くすることで労働市場の硬直を招き、失業者を増やすような施策こそが不満の鬱積とその噴出による社会不安を招くように見えます。日本の状況も、既存労働者の権利を守れと旗をふり、パートやフリーターを蔑視する左翼的なスタンス（かれらを十分な保護や福利厚生のないかわいそうな存在だと論じ立てるのは、そういう存在を二流労働者として蔑む見方でもあります）は、たぶん若年労働の就職難を後押ししてるんじゃないかと思えます。それはネオリベなんかよりは、死に損ない労組左翼のせいがあるかに大きい可能性もあります。文科省（すでに文部省ではありません）は、学生の完全就職まで面倒みきれないし、それでかれらを責めるのは筋違いでしょう。大学院は、少なくとも失業するまでのバッファを増やす役割は果たしています。大学院が増えなければ、そこに行った人たちは就職できたんでしょうか。そんなわけないでしょ。ほんと、リフレ策がとられて景気が回復すればこんなことは「問題」でもなんでもなくなるんですが。

takutaku 2005/11/18 06:21

やまがたさんは dojin さんの議論にお答えできるのでしょうか？
あと、フランスの暴動がリフレで解決すると思われるのでしょうか？

やまがた 2005/11/18 08:00

>やまがたさんは dojin さんの議論にお答えできるのでしょうか？

もちろん。「それがどうした」の一言です。左翼がフリーターを組織化したら、かれらの労働力としての存在意義がなくなればかれらも使われなくなるでしょう。不景気で労働需要の絶対数が減っているために、従来の正規雇用を減らそうという動きが起きていて（「いわゆるネオリベ」ですが、別にそうした思想的根拠でやってるわけじゃなくて、企業は不景気の中でリスクを減らそうとしてるだけです）、左翼的な運動は雇用の流動性を減らす方向に努力することでそうした雇用形態に対する需要すらなくす方向に動いているという話です。不景気が最大の問題で、「ネオリベ」なんてのが別にあるわけじゃなくて、具体的にある労組左翼は問題を悪化するように機能しているという話で何も「お答え」するものはないんですが。

>フランスの暴動がリフレで解決すると思われるのでしょうか？

ほう、フランスはデフレなの？

でも ECB がユーロを下げるゆるい金融政策をとれば、失業は減って暴動の原因は多少は解消するでしょ。

さらに現状で企業に「いわゆるネオリベ」の方針をやめろというのは、多くの企業にとってつぶれるというに等しい。つぶれたら失業者ははるかに増えます。ですから「いわゆるネオリベ」の方針をとったからこそ、現状はこの程度ですんでいる、と言う見方も十分なりたつし、そっちのほうの方が妥当でしょう。フランスは手厚い労働者保護のせいでそれができなかったのです。

いずれにしても、院卒が社会不安を招く、就職先のない大学院はナチズムにつながる、だから文科省が悪いという内藤氏のへんてこな議論はあまりに酷い。基本的には就職難を引き起こしている経済状況が問題であり、院の増設はこの状況下では景気回復までのバッファ増大として役にたつものです。それがなければ、院にも行けなかった人はますますささくれるだけです。

内藤朝雄 2005/11/18 17:04

ネオリベという曖昧な言葉はよくなかったですね。もちろん左翼には反対です。わたしは、公務員と企業で高給を取っている中高年を大量に解雇するか賃下げするべきだと思っています。そのうえで、国や地方自治体が持っている土地や建物を売ったり、リースに出したりします。税金は上げます。そのうえで、いままでの国や地方公共団体の仕事を大幅に民間に委託します。税金を安くして質の高いサービスを行う企業を通じて市場に環流させます。福祉を徹底的に民営化します。旧来の「ネオリベ」のイメージは、福祉を薄くし、かつ民営化する（その分を保守的な「伝統」にまかせる）というものでしたが、わたしは、福祉を厚くし、かつ民営化する、というものです。医療はタダにし、教育はチケット制にします。中高年がなぜ若年層よりも高い賃金を必要としたかということ、医療と教育に金がかかったからです。医療をタダにし、教育をチケット制にすると、中高年が若年者よりもたくさん金を稼がなければならないという縛りが消滅します。こどもの学費は親が払うのではなく、チケットでまかなわれるわけです。中高年の賃金を下げた分、若年層を大量に雇用することができます。また、このような手厚い福祉によって人間の尊厳をコーティングして、はじめて、市場の効率化が達成されます。コストのかかる終身雇用をやめて、労働力のジャスト・イン・タイム化を行うためには、手厚い福祉とうまく機能する労働市場が必要になります。労働市場を機能させるためには、能力の汎用ユニット化（デルコンピュータのユニットのような）とその組み合わせシステムが必要になりま

す。企業特殊な側面をぎりぎりまで削ることで、すべて自前の高価な労働力と比べたら比較的安価な汎用労働力を労働市場から適時調達することができます。

また、労働人口のほとんどすべてをフリーターにし、正社員を極力なくして、フリーターと正社員の Quality of Life をほぼ同じにする必要があります。正社員かフリーターかでなく、希少労働能力（この人しかできない労働）をどのくらい内蔵しているかというスペックによって収入が決まるシステムです。失業中は、バッファーに立ち寄って、この希少労働能力をゲットします。希少労働能力をゲットする能力が低い人でも、福祉によって人間らしい暮らしができます。

このシステムを達成するための福祉のために、税金が40パーセントになってもかまわないと思います。

バッファーとしての大学院には大きな副作用があると思います。少なくとも文系の大学院は、何の役にもたたない設備投資に対して不相応なプライドとナルシズムを蓄積させ、わたしが問題にしているような卑小感と思い上がりと憎悪と妬みと攻撃性の蔓延を引き起こします。少なくとも文系の大学院は、本来そうあるべき自己像と現実の境遇のギャップが厄災をもたらすタイプのバッファーです。憎悪に満ちあふれていない社会に住むことは、大切な Quality of Life の項目のひとつです。バッファーならば、大学院ではなくて、チケット制の職業訓練サポート団体でおこなうべきです。バッファーは、職業に直結するバッファーであるべきです。

わたしは経済の問題と社会に蔓延する憎悪の問題が重ね合わさる地点でものを考えるべきだと思います。

shinichiroinaba 2005/11/18 17:32

内藤さん、ひさびさにあまりといえばあまりにストレートな、左右を問わずラディカリストにはありがちの、既得権益へのルサンチマンに駆動されたかのごとき清算主義というかシバキ主義の発言に出会ってちょっと笑えます。一応拙著『教養』は差し上げたはずですので、それにプラス竹森俊吉『経済論戦は蘇る』あたりを読まれるとよいかと存じます。

内藤さんの構想は基本的にはフリードマン流のクーポン制福祉国家（立岩風にいえば「分配する最小国家」？）構想でしょう。それがうまくいくためには最低でもマクロ経済の安定（つまりは好況）という条件が満たされていなければだめです。日本の現状はそこからまだちょっと遠いので、少なくとも時論的にはダメです。

また実質賃金の大幅切り下げという荒療治も、不況時には問題外であるのは当然、よほどの好況時であっても、短期的に行えばそのショック自体がマクロ的な不況へのひきがねになりかねません。内藤さんが考えるような大規模なリストラは、基本的には定年引退による自然減を利用してゆっくり行うしかないでしょう。簡単にいえば、内藤さんが考えるような一挙的な改革は、それ自体がルサンチマンの所産である可能性が高いのみならず、強引に実施されればそれがまた新たなルサンチマンを引き起こすであろう、ということです。

再三言いましたとおり「金持ち喧嘩せず」の精神がとても大事だということです。そのためには、貧乏人のふところをあったかくしてやって「失うものがある」プチブルにしてやらねばならんのはもちろんですが、かといってその負担を金持ちに負わせすぎてもいかん、ということです。あんまり重税をかけると金持ち連中もいらん被害者意識にとりつかれますから、コワモテで迫るよりも連中の自尊心をくすぐることを考えましょう。

基本的にはストレートかつ強引な再分配はできるだけ避けて、パイそのものの拡大を通じてなんとかしよう、ということです。

この世は悪人とバカと小人で一杯です。ラディカルな人たちは（右も左も）それが我慢できなくて、悪人をみんなぶち殺すかそれとも改心させ、バカと小人もやはりみんなぶち殺すかそれとも再教育して賢い大人にしたい、と考えているのではないのでしょうか。

それはもちろんある程度は可能でしょうが、限界はあります。現実問題として、改心させ再教育することには限界があるのです。その限界にぶつかった時、悪人やバカや小人の存在を許せない人には、もはやそいつらを「ぶち殺す」選択肢しか残っていないように見える、ということです。

もちろん本当はそんなことはありません。たとえば小泉義之をパラフレーズするならば「自然死を待つ」という選択があります。しかし自然死までは時間がかかりますので、そのあいだを待つということとはつまり

「我慢して共存する」ということに他なりません。そしてその我慢を可能とするための条件作りが、宮台真司がいう「バカが伝染らない仕組みを作る」ことです。しかし宮台は「バカが伝染らない仕組み」の内実について詰めることを怠りました。

景気がよいこと、パイが全体として拡大していること、は「バカが伝染らない仕組み」のすべてではないにしても必須の一部をなすといえましょう。

内藤朝雄 2005/11/18 20:15

ルサンチマンについて暖かくいちっていただくのはこれで二度目です。わたしの「臨床」社会学は、逆転移観察みたなことをやっていて、バカの臭い息を吸い込み手応えに嘔吐する自分自身の内側からの反応を使って、それを論理形式に変換する（パタンを抜く）という手法をとってきました。論理形式の行間にルサンチマンの電波がゆんゆんになるのはそういう作り方をしているからでしょう。そういう「かませ犬」法を使うと、バカのパタンをじゃかさか抜けますが、肉体的に辛いです。

さて、バカの典型ともいべき、いわゆる「お役所の掟」とか「社畜」が猖獗をきわめたのは、景気がよく、パイが全体として拡大しているときでした。

それから、北欧諸国が一人当たりで稼ぐ金額がアメリカを超えているのはなぜなのでしょう。デンマークは古いお役所型福祉から企業型福祉に転換して、福祉の水準を逆に上げてしまったという記事を読んだことがあります。ちょっと眉唾ですが、どうなのでしょう。北欧諸国は企業ともうまくやっているようです。いったい何をやったのでしょうか。オランダはフリーターと正社員の格差を小さくするのに成功していると聞きました。

デンマークは、チェンジを景気が絶好調のときにやったのでしょうか。絶好調のときは、あまりものごとを変えたがらず、危機感にプッシュされて改革をするものです。おそらくお役所型高福祉で経済がボロボロになって、なんとかしなければ、でも貧乏人はどうとでもなれというわけにもいかない、というところで、資本主義駆動型高福祉の新バージョンを生み出したのかもしれないと思います。

わたしはこれから北欧やオランダの勉強をしたいとおもっているのですが、定評のある専門家としては、どんな人たちがいますか。

あそこでできて日本でできない理由は何でしょうか。

ところで北欧諸国やオランダでは、だいたい王室が残っているというのもなにか興味深いです。これもひょっとしてバカが移るのを防止するシステムなのかもしれません。

親が学費を出すというシステムをなくすと、親が貧乏だから大学にいけなかったというルサンチマンを減らすことができます。また有能な人材を適切に社会の各ポジションに配置するのにもよいのではなかとと思います。

馬鹿が移らない仕組みとしては、やはり閉鎖空間に閉じこめて大奥ごっこをさせないとか、人間関係をどーたらこーたらしているヒマがあったら前向きに仕事せよとか、多様な選択肢のチャンスに満ちているけど要求される努力のハードルが高いとか、自由な場でいろいろ工夫しながら努力するエートスの場にあるとか、いやな感じになったら能力のパスポートをもって別の場所にチェンジできるとか、そういうことかなと思います。

やまがた 2005/11/18 21:25

稼ぎの定義や指標にもよるでしょうが、比較において最も妥当と思われる ppp ベースの一人あたり GDP で見るならアメリカは北欧諸国より 2 割近く高うございます。北欧諸国は日本並みですねえ。

http://www.undp.org/hdr2003/indicator/indic_4_1_1.html

したがって過度な希望を持つべきではないと思います。システムとしておもしろいのは事実ですので、釈迦に真珠かもしれませんが、エスピン＝アンデルセンあたりで大枠をおさえるあたりが手始めではないでしょうか。

あと、内藤氏自身が自分の給料を半減させることに同意したり、自分の所得の半分をどっかの若者の雇用にまわしたりすることを実践してるのでない限り（いやそれでも）その遠大な社会革命計画は白昼夢でしかないし、こんなものをまともな提案のつもりで練っているとすれば、ぼくから見れば内藤氏も立派な「馬鹿」の一人でしかありません。左翼はダメといつつ、内藤氏の提案はまさに古典的な社会主義カクメイの焼き直しにしか見えませんが。それが見えないとすれば、人の馬鹿がうつるのを心配すると同時に、ご自分の「馬鹿」が人にうつらないような配慮もご検討いただければ幸いです。いろいろとお感じになっているとおぼしき鬱憤は理解できないわけではないのですが。

それに、院に行くから救いがたくなる、という可能性の他に、もともと救いがたい人間が院に行く可能性も考えたほうがよいのでは（入院と言われる所以でございます）。もしそうなら、院はバッファとともに、隔離施設としての機能も持ち得ますので、馬鹿が拡大しない仕組みの一環にもなり得ますよ。すでに研究者や大学人、教育関係者は、ぼくから見ればどうしようもない世間知らずの比率が異様に高い、社会不適応者のスクツです。そういう連中を敢えて内藤氏のご提案のように世間に野放しにする努力をすべきかどうか、立ち止まって考えるべきではないでしょうか。

さらに内藤氏のおっしゃるように、学校の機能というのが単なる職業訓練施設であるなら、むしろ高卒時にみんないったんコルホーズに送り込んで1年ほど働かせてはいかがでしょう。その意味で、ついでに兵役の義務なんてのも検討の余地があるかもしれませんよ。

また伝聞になってしまいますが、「一分間エコノミクス」訳者解説での竹内宏によれば、日本の経済成長をささえた戦前戦後の起業家たちの多くは、家が貧しくて高校や大学にいけず、進学できた同級生に負けまいというコンプレックスを原動力にしていたとか。ですから進学できないのが即いけないわけではないかもしれませんが。内藤氏の議論では、院にいてもルサンチマン（だから院はだめ）、教育を受けられない人もルサンチマン（だからチケット作って進学させる）、結局人はどう転んでもルサンチマンで、絶望なんです。まあブログのコメント欄でのアレにそんな整合性を求めるのも酷ではありますが、でもちょっとあまりに変です。

そして最後に。

>さて、バカの典型ともいうべき、いわゆる「お役所の掟」とか「社畜」が猖獗をきわめ
>たのは、景気がよく、パイが全体として拡大しているときでした。

ま、例によってこれらが何を意味しているのかあいまいではありますが、本気でこんなことを思っているとしたら、内藤さんは自分がどんなに恵まれた環境にいるかさっぱりわかっていないのです。その「役所の掟」のおかげで、ほとんどの場合に比較的少ない役人数でそこそこ優れたガバナンスを提供することが可能であり、内藤氏が見下す「社畜」たちは一方でプロジェクトXを実現した人たちでもあります。今仕事をしている途上国では、杓子定規な役所の掟や、会社に心身をささげる社畜が日本の1/10でもあればどんなに事態がよくなるか、何度も天をあおいでおります。繁栄がそうしたものを生み出したのではなく、役所の掟や社畜が多少なりとも繁栄に貢献した可能性を考えられない内藤氏は、ひたすら大企業と官僚にルサンチマンをむきだしにするだけの2ちゃんねらーと（ひいてはご自身が批判してみせる「バカ」たちと）どれだけの差がありましようか。もちろん、それらの弊害というのもあります。でも、いいところもあるのかもしれないですよ。

内藤朝雄 2005/11/19 00:50

まずもって、勤勉のタイプにはいろいろあって、そのなかの一つが「社畜」や「お役所の掟」であって、そうでもありえたよりベターな勤勉のスタイルを「社畜」や「お役所の掟」が不可能にしたと考えることもできます。また、「社畜」や「お役所の掟」は非効率とぬるま湯経営に陥る側面も有しています。日本のホワイトカラーの時間当たりの労働は非効率であると言われてています。

さらに、大学と文系大学院は違います。文系大学院は神学校のような不健全なメンタリティを学部以上に醸成し、大学に専任の職を得られなかった場合のルサンチマンは著しいものがあります。自己意識の問題だけでなく、実際につぶしが効かないのです。もともと普通の人がイスラム神学校に行くと自爆をやるようになるように、大学院でわけのわからぬ呪文をとこなえる生活をしたおかげで救いようのないバカになることは、大いに考えられます。心理系の呪文はへたれを量産し、左翼系の呪文は手前勝手な憎しみを膨れ上がらせて危険です。

理工系はまったく別です。

たとえば仮に貧しいゆえに中卒高卒だった優秀な人間1000人のうち、経済成長を支えた起業家が10人として、あとの990人は、やはり理工系の大学に進んでいた方が、10人以上におおきな社会的貢献をしたかもしれません。経済成長は工学部系の能力に支えられていたはずです。つまりエンジニアの力です。かれらは、社畜系よりも職人系だったかもしれません。おなじように朝から晩まで働いていても、社畜系と職人系はエートスがまったく違います。

わたしは大企業や役人にまったくルサンチマンはありませんよ。最近はやくなってきていると思います。稼ぎについては記憶違いでHDIと混同していたようです。ただ現在の日本と同程度の稼ぎです。このぐらいで十分です。この前提のうえでも、わたしが先程言ったことは成り立つと思います。40パーセントの税金でも、なぜ資本主義と調和し、現在の日本程度には稼いでいるわけです。Quality of Lifeに直結するHDIではアメリカを抜いている地域が多いです。

それから制度をこうした方がよいということと、制度が変わらないことを前提に自分がどうするかということはまったく別です。この二つの水準を混同して「おまえはどうなんだ」とわめくのが典型的なバカ左翼の論理でした。おそらく遊んでいるのだとおもいます。さすがに山形さんがマジでこの論理を歌い上げる方には思えません（マジだとしたら笑うしかありませんね）。

ただコンセンサスを得るのがむずかしそうです。このコンセンサスへの道は遠そうです。

あと移行プロセスが見えてきません。成功した国々は、いったいどうやったんでしょう。

やまがた 2005/11/19 02:19

内藤様。

だいたい内藤さんの議論はわかりましたし、いい加減コメント欄には長くなってきたので、そろそろ切り上げます。さてぼくに言わせれば、相変わらずしょせんは無力な空理空論ですな。「ありえたかもしれない勤勉のスタイル」は、ありえたかもしれないけれど実際にはなかったし、かなりの確率でありえなかったか、あるいは長期的な安定性を持たないESSではないものだった可能性が極めて高いものでもあります。そんなものを頼みに、現状の多少なりとも機能しているシステムを否定すべきだと考えるほどの空想家ではありませんもので、内藤氏に一向に同意できません。その現状よりはるかにすばらしい「ありえたかもしれない勤勉のスタイル」って何です？ それを出してからあれこれおっしやいな。また、役人や大企業はオクケーだけれど、役所の掟や社畜はダメ、という議論は、一般には理解されないでしょう。掟や社畜をきちんと定義してから議論を展開されたほうがよいかと存じます。

また文系大学院への内藤さんの私怨はたいへんによくわかりましたし、もう何も申し上げませんが、これまただれにも支持されない議論ではあると存じます。また、イスラム神学校にいくと爆弾を投げるようになる、とかいう偏見に満ちた発言は控えられたほうがよるしいかと。非イスラムの理工系の大学にいったって、サリンを撒くバカはいるのですし。

さて最後に

>制度をこうした方がよいということと、制度が変わらないことを前提に

>自分がどうするかということはまったく別です。（中略）さすがに山形さんが

>マジでこの論理を歌い上げる方には思えません（マジだとしたら笑うしかありませんね）。

のくだりについて。では大いに笑ってください。ぼくはマジでその論理を歌い上げます。というより、この記述、特に「制度が変わらないことを前提に」という部分にこめられた内藤さんの制度というものに対する発想を、ぼくは否定します。

内藤さんの発想は結局はお上頼みです。内藤版の制度は、法律とかなんとかでお上が勝手に作って衆生に押しつけるものです。そしてお上が制度を変えてくださるまで、自分はなにやらあれこれ口だけ不満を述べ、身勝手な妄想をふりまいて、手をこまねいておればよいという低級な考え方です。

ぼくにとって制度とはそういうものではありません。制度とは、結局のところ、その社会の構成員が自主的に（いやいやかもしれないけど）やることの総和です。法律なんて、そのごくごく一部でしかありません。ですから制度を変えるというのは、ぼくにとってはまず自分からその行動を起こすことです。現在の著作権制度やソフトウェアのあり方について疑問だと思えば、ぼくはそれを少しでもよくすると思われる活動をし、またそれに関連した団体に寄付をして、現状を変える努力をします。途上国援助についても、足りないと思っているので、そこそこの寄与を自分の評価に基づき私的に行います。その上で、言論活動を通じて制度改変の必要性をも訴えます。それに賛同して自主的にやる人が増えれば、制度というのは変わるんです。既得権益がにらみ合いになったり、手詰まりに陥っているときにのみ、お上頼みの強制的なてこ入れはあり得る。またマクロ経済政策のような、個人では何ともならない部分もある。でも、個人でできる部分もあるのです。むしろそのほうが遙かに大きいのです。Put your money where your mouth is というのはぼくの大きな行動規範の一つです。なにやら法律によって社会の全員に何かをやらせるのがよいことなら、外部性とか合成の誤謬とかはありますが、それをぼく一人がやることだってよいことなのです。

したがって「制度が変わらないことを前提に自分がどうするか」という発想自体がぼくにとっては口先だけの人間の逃げ口上でしかありません。制度が**変わることを前提として**、変えるために自分がどうするか、というのがぼくの論理ではありません。教育機会が平等化されなら税金40%とられていいというなら、所得の40%（のいまの税金との差額）を自主的に教育機会の少ない人にあげてはいかがでしょうか。多くの人が内藤さんの活動および議論に感じ入ってそのひそみに倣えば、そのとき制度はすでに変わってるんです。制度というのは、ぼくたちの内部にあるんです。ぼくが変わることで、内藤さんが変わることで、制度も変わるんです。

（もちろん、すべての行動が制度改変に直結するわけではありませんし、自分で何かをするのがすべてよいとは限らないのも当然のことです。バカで無意味ではた迷惑な行動は当然あります。だからその行動自体本当に有用かという検証は要るのですが、それはまた別の話。）

もちろん内藤さんは、「自分がどうするかということはまったく別」と理屈をつけて、何もしないで相変わらず愚痴をたれるだけでしょう。ついでに山形がいかに非現実的なバカかを論じ立てて嘲笑するでしょう。でも、社会が変われることを信じられず、さらにその変化に自ら投資することもできない人が唱える制度改革論って、いったい何の役にたつんです？ それは通常、ニヒリズムと呼ばれます。ま、せいぜい頑張ってください。いつかお上が内藤さんの訴えを聞き届けて、内藤さんすら自分ではやる気のない制度をみんなに押しつけてくれるといいですね。では。

内藤朝雄 2005/11/19 04:51

嘲笑はしませんが、頭の中が???です。というのは社会科学的にあまりにも基本的なミクロとマクロの水準の問題をこの人が混同するはずがないとすれば、何を言おうとしているのか？などと考えてしまったからです。

まさか、「税金が10パーセントの1億人規模の社会で生活している一人の人が税金を40パーセントにすべきだという政策を主張するためには、まずその人の30パーセントの収入を寄付すべきだ。それをしないならば、税金を40パーセントにすべきという主張をすることはできない」といった主張をマジでする人が、本を書いて原稿料をもらったりするはずはないですよ。

一億人規模の社会は内的な存在などではなく、外在的で拘束的なメカニズムなのだから、ぼくとあなたの二人が変わったぐらいで、変わるわけない。むしろ個人にはモノとして硬質にぶちあたるものです。

だから、せめて活字で一粒の種をばらまいてそれを千倍万倍にして働きかけをしようと努力しているわけです。場合によっては一億人規模の社会に影響させるかもしれないという希望にしがみついて。

自分の収入の40パーセントを寄付することなどは、まったく無に等しい影響力しか及ぼしません。ただの自己満足ですそんな基本的なことをいわなければならないのか、それとも遊ばれているのか、いまだによくわかりません。税金40パーセントは、特定の個人がやったりやらなかったりするものではなくて、社会全体で行われて福祉に環流して、はじめて一人一人にとって意味を持つ政策です。小学生でもわかる論理です。

すくなくとも山形さんがいっていることは規模の小さい社会でしか通用しないことです。

社会変革は、ある機能的な位置にある項が占めているときに、この機能的な位置をほかのそうでもありえた項が占めたかもしれないと想定して、その像を描くことによってヴィジョンを描きます。そうでなければ、今あるものは、これまで機能してきたというだけの理由で正当化されることになります。将来については、これまで機能してきたものが機能するかどうかかわからず、このわからなさは他のそうでもあり得た機能的等価物についても同じです。

たとえば組織の中で利益の交換を続けた人間関係への忠誠というこれまでの項から、完成度の高い職務遂行への忠実という項へと、エートスを変換すると、どういう波及効果や得失が生じるかというふうを考えるわけです。たとえば東海村の臨界事故や三菱自動車のリコール隠しは、人間関係への忠誠と職務への不忠実という組み合わせで起こっています。

「日本的」というレッテルを貼られたメンタリティのほとんどは、数十年程度の新しいものです。今あるものは、次の時点ではあっけなく変わっています。

イスラム神学校という表現ははまちがえました。撤回します。正しくは反米武力闘争のネットワークが設立した特殊なイスラム神学校ですね。うっかりしていました。

わたしは文系大学院にはそれほど怨念を持っていません。それに文系大学院を否定しているわけではありません。わけのわからん呪文をぶつぶつとなえている文化人は、人口のごく一部、必ず存在する必要があります。ただし、それは就職先があるという前提での話しです。就職先がないのに、文系大学院を量産すると、先に警告したような危険が増大します。退院してからの人生を痛めつけないよう、需要と供給を予測しながら定員を設定すべきです。バッファは、自動車教習所のようなものの方が望ましいです。それはコルフォーズとか徴兵制のようなものとは正反対です。

社畜はもちろん俗語で、構造的に、企業にありとあらゆる人格と生活と社会性と現実感覚の側面を吸収されて生きる傾向が大きいことを、家畜の比喩で表現した語です。

やまがた 2005/11/19 09:18

>自分の収入の40パーセントを寄付することなどは、

>まったく無に等しい影響力しか及ぼしません。

(中略)

>すくなくとも山形さんがいっていることは

>規模の小さい社会でしか通用しないことです。

いいえ。マクロはミクロの積み重ねでしかありません。それは100人の村だろうと1億人の社会だろうとまったくかわらないのです。一人の活動の量は確かに小さい。でも、マクロな制度の変化は、その小さい活動の積み重ねでしかない。所得の4割を税金として召し上げようという制度を作るためには、一応民主主義の建前として、その社会の構成員みんな—あるいは過半数か多数—が、所得の4割を社会に拠出することがよいことだと納得しなくてはなりません。そしてそこで納得するのは、「マクロな社会」とかいう抽象的なものではなく、ごく小さな力しかない、ミクロな個人なんです。

その議論を納得させようとしている当人が「オレの貢献なんて小さいから行動しない」と明言するのであれば、その人は納得させるべき数千万人の最初の一人である自分すら説得するのに失敗しているのです。

そして有効に機能する制度においては、人は自分の貢献が小さくても、それが社会にとって確実によい影響を与え、役に立っているのだと感じなくてはなりません。自分の貢献、自分の行動が小さくても、それが多少なりとも社会を支えているのだと実感し、制度だから何かをやるのではなく、自分が自発的にそうしたいから(少なくとも、そうしないと困るから)やる、という状態にならなくてははいけません。人が社会に所属し、社会の一員としての意識を持つというのはそういうことです。みんなが「おれの貢献なんか小さいんだからやっても無駄だ」と思うような制度は、制度としてそもそも成立しないし、それが拡大すればその社会の存立すら危うくなります。これはあんたら学者さんが言うアパシーってやつです。

内藤さんは自分が社会の一員であるという自覚をなくし、なにやら抽象的な「マクロ」なるものでしか社会をとらえていません。そして自分は己のアパシーにあぐらをかいています。でも、自分の行動が何も影響を持ち得ないと考える人が、なぜ自分の言論ばかりは数千万人に影響を与えられるなんて思うんでしょう。自分一人すら行動させることのできない、空っぽの言論しか紡げないくせに？ そういう言論をすべきでないとはもうしません。また無理に金を出せとももうしません。家のローンとか宴会代とか、いろいろ物いりでしょうし。でも、税金を増やす、というのが目的ではなく、その税金でしたいことがあるんでしょ？ その方向でできる行動はいろいろあるでしょう(見当違いの行動でないことは確認のうえ)。もちろん、それをしない言い訳はいろいろあるでしょう。しないであれこれ制度論を他人事のように述べ立てることも、するなとはもうしません。ただ、なぜその言論が机上の空論にとどまり、説得力を持たないばかりか、卑しくさえあるのかについては少し考えてみるのも一興ではないかと思えます。内藤さんは、決してわからないでしょうから、考えるだけ無駄です。でも、これを読んでいる他の人は、是非とも考えていただきたいと思えます。

内藤朝雄 2005/11/19 10:10

「問題解決アプローチにははさまざまな水準がある。たとえば、次の二つの水準を考えることができる。

I・制度的枠組が変わらないことを前提にした問題解決アプローチ(今、目の前で苦しんでいる「このひと」をいかに救うかという、個別のケースに対する問題解決アプローチは、この水準に含まれる)。

II・マクロ的に問題が蔓延しエスカレートしないようにするにはどうしたらよいかという問題解決アプローチ

いじめ問題に対するこれまでの議論では、このに水準を考慮していないと思われるものが多い。

この二水準はしばしば相反する。たとえば、現存の構造の中で生じる悲惨に一人一人が対処する営為の集積が、当の構造の再産出に強く関与する場合もある。また、望ましい社会像に準拠した行動をとることで個人が悲惨な運命をたどることもある。次の事例は、I水準とII水準の使い分けを誤った典型例である。

【事例1・学校なんていかになくていい】

登校拒否と呼ばれる若い人がある精神科医のもとを訪れた。その精神科医は「反学校囲い込み主義」者であった。精神科医はおもむろに「学校なんていかになくていい」と言った。それを契機に激しい家庭内暴力がはじまり、家族は崩壊の危機に陥った。父親は深い鬱状態になり自殺した。

学校が若い人のあらゆる生活を囲い込む社会状態では、広範な習慣形成が学校生活の影響下で形成されており、リアリティ全般が学校化されているであろうことは、「反学校囲い込み主義」の精神科医であれば容易に想像がつくはずである。しかし上記の精神科医は、学校への囲い込み政策に反対する立場から、クライアントに対して政策論的に「正しい」主張をした。精神科医は学校に自己存在を根こそぎ収奪された状態で訪れたクライアントに、おもむろに「学校になんていかになくていい」と言ったのである。

ケアの専門家としての基本的な考え方は次のようなものであろう。たとえば親から虐待される子どもほど、その加害者(親)に対して、普通の子どもなら示さないような強烈なしがみつきを断続的に示す傾向がある。また、カルト教団に「洗脳」された被害者や「わるい男(女)」に驚くべき金額を貢がされる女性(男性)

は、自己の存立基盤をその加害者との関係に負うまでになっている。そのとき心理臨床家は、おもむろに心理的切断をはかるのではなく（この乱暴な処方、被害者を「自殺」に追いこむ危険がある）、安心できる別の関係領域の飛び地をふくらませながら、少しずつそこに自己存立の基盤を移していくように促す。加害者との心理的切断を断行するとすれば、その後である。集団生活でぼろぼろになった生徒の多くは、「学校なんていかになくていい」と言われることで救われた気持ちになる。しかし「重症の学校病患者」の場合、その言葉で救われた気持ちになることができる段階にまでもっていくのがたいへんな仕事であり、このタイミング判断が専門家の特殊技能となる。

上記の精神科医の判断ミスを次のように考えることができる。すなわち、Ⅰの水準に大きなウェイトづけがなされるべき職能領域の局面に、Ⅱの水準での「正しい」社会変革活動の局面が混入し、専門家としてのタイミング判断を狂わせたのである。

これとは逆に、当事者の感情表出は加害者へのしがみつきですら共感的に受容すべしというⅠ水準での「ただし」原則を、加害を構造的にもたらす制度を政策的に尊重すべしというⅡ水準の主張へと横滑りさせる論理もある。

その一例として、強制的共同体としての学校を自由化から守ろうとする人たちの声をあげてみよう。

(中略：以下「学校応援団」批判)

Ⅰ水準とⅡ水準の議論に戻ろう。上記の精神科医がⅡ水準の「正しい」制度・政策論をⅠ水準に混入させ、クライアントに不適切な「説教」をするのに対して、「学校応援団」はⅠ水準でのみ「正しい」受容と共感の論理をⅡ水準に混入させ、その混乱に乗じてⅡ水準での正しい制度・政策論を覆そうとする。」

(拙著『いじめの社会理論』)

<http://www.amazon.co.jp/exec/obidos/ASIN/4760120882/qid%3D1102954799/250-9534838-1961055> より)

どうもマジで言っているらしい山形さんにⅠ水準とⅡ水準の区別の問題を語ろうとおもって引用していましたが、そんなことはどうでもよくなりました。それよりもこの事例Ⅰの精神科医の失敗は、ラヂカリストの政策の失敗と同型ですね。社会学者の仕事は青写真(社会構想)を描くところまでで、あとは経済学者のタイミング判断におまかせしておいた方がいいような気がします。

Yasuyuki-Iida 2005/11/19 10:21

いまさら（そして聞かれても居ないことに返答することになってしまいます）ですが本田氏の言及にたいして.....少々コメントを。比喩を使った議論は不毛だとは思いますが、ちょっと上手いこと言うなあと思ったのは「ぽかーん↑」氏の指摘です。

経済政策の手法選択に関してマンデルの定理というのがあります、「各政策手段は、それが相対的に最も効果を発揮する政策目標に適用すべきだ」というもので経済政策の比較優位原理とも呼ばれます。

そこから考えますと、ターゲット型の経済政策というのは完全雇用からの乖離を小さくすることに相対的有意を持つのであって、その他のことは他の政策に任せるべき仕事です。その意味で、

>仮に景気が悪い状態の中でも不利な者ができるだけ

>不利なままにならないような制度を考える

これは（私はこれこそが最も重要な政策だと思う）金融政策の仕事ではないので、金融政策の話をするときには積極的に切り離して議論しなければならないと思います。田中さんがこういった影響にも言及されていますが、これはあくまで参考までに雇用にも悪い影響はないよといういみだと思います。通常は、金融政策を所得再分配に割り当ててはいけません。

なお、

>永続的に景気がよいというようなことが可能なのかどうか疑問ですが

についてですが、長期的な完全雇用 GDP (=非自発的失業がなくなる GDP 水準) というのは労働人口・資本ストック・技術水準から決まっており成長政策・競争政策と呼ばれる政策群の範疇です (つまりは金融政策の役割ではない)。で実際の GDP と完全雇用 GDP の差を小さく保つための政策が安定化政策と呼ばれます。安定化政策の手段が財政や金融。

その意味で経済論壇でのリフレ派という括りには疑問があります。インフレーションターゲットや名目 GDP ターゲットを主張する人の多くは「ルールに従った経済政策をすべきだ」「今は通常のルールを適用すると徹底緩和継続が必要な時期だ」というふたつの考え方をもっています。だから、景気が過熱して来たら「今は通常のルールを適用すると徹底引締が必要な時期だ」となるでしょう (80 年代後半の岩田規久男氏を想起せよ)

内藤朝雄 2005/11/19 11:30

山形さんとかぶってしまいました。
社会を単数で語ることはまちがいです。
社会には社会 A、社会 B、社会 C.....とあり、その水準ごとに何がアノミーであるのかが異なります。
40 億規模の人類も一億規模の国も家族も友人のグループも地域も、全部大から小まで社会ですから。
また社会の水準ごとに統合のメディアが異なります。
そして、それらは断固、異なるべき!なのです。
たとえば国を家族のように大切にすべきだという、水準の混同を煽り立てることは、百害あって一利なしです。零戦でアメリカ空母に突っ込んだりする悲惨は、一億規模の社会 A (大日本帝国) を、数人規模の濃密な社会 B (家族) の統合媒体で統合すべしという要求によって煽られます。国家を家族のように思わない者がふえることはアノミーである、というは右翼の論理です。
国家を家族のように思うことが厳しく当然視される北朝鮮や戦時中の大日本帝国のような社会ほど、不正と残酷が蔓延します。
みわたすことができない不透明な人たちの不透明な連鎖としての一億規模の社会にいきわたるべき統合の媒体は、きちんと物象化された普遍的なものが行き渡っていることへの信頼です。

kondou 2005/11/20 03:13

もちろんそうですよ。だから国が「家族のように」福祉を先導するべきだという議論も、国が「別の志向を持つ社会 B」に対して医療をタダにして教育をチケット制にするべきだという議論も、慎重であるべきですよ。いずれにせよ内藤さん、大変失礼な言ながら戯画的な例えの連投を控えられて、少し話を戻しませんか？

ご自分で「コンセンサスが得られにくい」とお認めのように、現状では空理空論に近いその「社会学者が考える青写真(社会構想)」を、長期的に斬新的に目指す立場がありうる (かもしれないかもしれない)、ということは誰も否定は致しませんよ。北欧は、それ自体は興味深いモデルではあるとおっしゃった山形さんのように。

で、それを実現し、その構想を下部的に支えてくれるかもしれない「不況脱出」なり「経済状況の安定・成長」なりに、短・中期的にリフレ派や「いわゆるネオリベ」なりを織り込んでご自分の青写真(社会構想)を修正または留保してゆく必要は、お感じになりませんか？

性急なラディカルは、2ch 山口スレや「教養」の、正反対の隘路に絡め取られる危険があるという指摘に適合しちゃうように思えてならないです。

リフレ派や「いわゆるネオリベ」に対するリベラルの立場として、利用されることはマズいけど、利用されることを恐れて拒絶することも生産的ではないから、利用しちゃおうとコミットする方向・・・が、十分可能ではないでしょうか？つまり、「ミイラ取りがミイラにならないように」。

あるいはそれも「構造の再産出に加担すること」だとして、退けられますか。

内藤朝雄 2005/11/20 13:40

「それを実現し、その構想を下部的に支えてくれるかもしれない「不況脱出」なり「経済状況の安定・成長」なりに、短・中期的にリフレ派や「いわゆるネオリベ」なりを織り込んでご自分の青写真(社会構想)を修正または留保してゆく必要は、お感じになりますか？」

その通りです。だから、それをやっていそうな国々のやり方について、どうなってるの？と興味しんしんなのです。そのあたりのことに詳しい方がいらっしゃいましたら、よろしくご教示のほど、お願いいたします。それから、山形さんからの非難に答える作業でたくさん書き込みをしすぎました。

国の位置づけについては「国は保護する責任がある＝国は家族だ」というようなものではなく、抽象的な設定やコミットの質の問題であろうと思われます。

たまたま今現在コンセンサスが得られがたい提言が、即、空理空論とは限りません。またコンセンサスが得られた？空理空論によって、アメリカと戦争をするといったこともありました。わたしは欧州キャンペーンをきちんと打つと、「ニート」なみの流行は引き起こせると予想します。

誤解を避けるために。

大学院の話は、あくまでもマクロ的な人口層分析です。そのための行為者モデルを理念的に描いたのです。理念的にというのは、デフォルメしてということでもあります。就職が絶望的な大学院生の大半は善良な人々でしょう。わたしが描いたような呪文&妬み&憎悪の人は、おそらく十数人に一人ぐらいにとどまるでしょう。でも、仮に十数人に一人としても、その人口層はマクロ的に見れば危険だということです。現実の大学院や大学院生を貶めるつもりはまったくありません。問題は就職先がないということであって、そこから妬みとみじめさを「ただしい」ヤツアタリに変換する左翼と右翼の受け皿が増殖し、世にあふれ出す危険性を予測しているのです。就職先のない大学院はその培養基に「なりかねない」という将来予測です。

わたしは、大学院生を劣等な存在と言っているわけでもありませんし、大学院を潰せと言っているわけでもありません。就職先もないのに、これ以上大学院を増やすな！、増やすなら職業的技能と直結して就職できるバッファーを増やせ！、と言っているのです。